活動状況報告書（3 月分）

学生留学コース　槌谷　賢太

スペインでの留学も今月で最後になりました。やっと日本に帰ることができるという嬉しい気持ちと、スペインから離れてしまう寂しさが入り混じっています。初めてスペインに来た時は正直スペインのことがそれほど好きではありませんでした。事務的な書類も時間通りにはできない、不動産会社の人も時間通りに来ない、家の電子鍵が壊れてホテルに泊まらないといけない日もありました。日本ではありえないようなトラブルも多くあり、日本という国がどれだけ住みやすい国なのかということが身に沁みました。一方でスペイン人は陽気で温かい人が多いというのも事実です。

先日バルセロナマラソンに参加してきました(写真 1)。フルマラソンを走るのは２年ぶりで完走できるか心配ではありましたがなんとか完走できました。北海道マラソンも今まで何度か走ったことがありますが、日本との応援の違いはスペイン人の応援の熱さだったと思います。沿道の声援は大きく、あの声に励まされたランナーは多かったに違いありません。疲れて歩いているランナーがいたら他の人が肩を叩いて励ましている情景をよく見ました。日本でもそのような情景は見ることがありますが、日本人の感覚から言うと自分のペースで走らせてあげるのが優しさというような考えもあり遠慮する人も多いと思います。でもスペイン人にとっては声をかけて励ますこと、それがベストな方法なのでしょう。異国の地で優しさとは何かを考えながら延々と続く 42.195km を走っていました。

スペインで行う予定だった調査や実験も一通り終えて無事帰国することができました。サウロ先生はとても寂しがっていましたが、最後には”You are the future of Japanese dental research”と言っていました(写真 2)。「お前が日本の歯科研究の未来になれ」、この言葉を聞いて自分が何のために研究をしているのか、するべきなのか,そして留学をしたのか、少しヒントをもらえた気がしました。自分は日本という国を背負って留学していたということを再認識させられました。帰国したら、しっかりと北海道の地域医療、そして歯科医療そのものに還元しないといけないなと強く思いました。

最後になりました。私が留学に興味を持ったのは中学生の時に藤原正彦さんの「若き数学者のアメリカ」というエッセイを読んでです。藤原さんは「国家の品格」の著者でも有名な数学者です。著者が若い頃、30 歳手前で、戦後間もなく、アメリカという戦勝国に敗戦国という立場から留学をして、異国という多くの壁にあたりながらも強く生きていくというお話でした。中学生の私には海外で生活することの大変さが少しも想像できませんでした。そして留学というものは海外で知識を学び、母国に帰ってくるものだと漠然と思っていました。でも実際留学を終えた今はそれだけでは無いように感じます。言葉が通じず、文化も違う環境で、壁にあたりながらも強く生きて行くという経験そのものが、何よりもその人の人生をよりクリエイティブなものにするのではないでしょうか。

さてやや脱線しましたが、留学を応援・支援くださった皆様に感謝の意伝えて、最後の活動報告とさせていただきます。帰国後もインターンシップなどを通して、しっかりと北海道の地域医療へと貢献していきたいです。応援していただきありがとうございました！

写真 1

写真 2